

# 浮世絵大事典

国際浮世絵学会編 絵師や作品・画題だけではなく、彫摺・様式・風俗・芸能など最新の研究成果を盛り込み幅広く収録し解説。絵師・画家は江戸期から近現代まで網羅。浮世絵の膨大な情報を一冊に簡便にまとめた初の事典。特価二六二五〇円(08年10月末日まで)定価二九四〇〇円

(価格は税込)

# 日本家系・系図大事典

奥富敬之著 日本史上の名族一三二八を収録し、その由来・発祥(源流)、近代までの変遷過程などを解説。系図二二八〇を併せ掲げた比類ない事典。定価一二六〇〇円

# CD-ROM版 鎌倉遺文 古文書編 全四十六巻

竹内理三・東京大学史料編纂所編 中世文学研究には必須の史料となる鎌倉遺文の古文書三五〇〇〇余通を一枚のCD-ROMに収録。内容見本進呈 価格九四五〇〇円

# 能楽史年表 近世編上巻

鈴木正人編 序文表 章 古代・中世編に続き、近世編(全三巻)を刊行する。近世編上巻では慶長六年から貞享四年まで五六〇〇余項目を採録した定価一五七五〇円

# ジェンダー 愛・性・家族

岩淵宏子・長谷川啓編 日本の近現代小説より二十の作品をとりあげ、愛・性・家族をテーマにして、フェミニズム・ジェンダーの視点から読み解く。定価二二一〇円

東京堂出版

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-17  
電話 03-3233-3741 FAX 03-3233-3746  
<http://www.tokyodoshuppan.com>

# Japan Knowledge JKセレクトシリーズ Web版 日本近代文学館

編集・刊行 日本近代文学館

太 陽 明治28年〜昭和3年

博文館発行・全53冊・17万5千頁 一五二二万円

文芸倶楽部 明治28年〜明治45年

博文館発行・全284冊・10万8千頁 一八九万円

校友会雑誌 明治23年〜昭和19年 八五五〇円

第一高等学校校友会発行・全380冊・3万8千頁

CD・DVD版で好評を博した3タイトルをジャパ  
ンナレッジのWEBで提供。32万頁の膨大な・精緻な本  
文画像データに6万5千件の検索書誌データを付し3  
タイトルの串刺し検索を可能に。

読売・朝日・毎日新聞・共同通信にて絶賛紹介!

「見立」の意味がわかると浮世絵がおもしろくなる

# 図説「見立」と「やつし」

— 日本文化の表現技法 —

国文学研究資料館編 B5判・262頁・一〇、二九〇円

見立はあるものを別のものになぞらえること、やつしは昔の権威あるものを現代風に卑近にして表すこと。文学・美術・芸能のジャンルを超えて存在する日本文化の特徴的表現様式をはじめ明らかなにカラー図版105点・モノクロ図版54点から読み解く日本文化全般に潜む表現。【好評につき増刷出来!】

八木書店 出版部

【呈詳細内容見本】 \*定価は本体+税5%の総額表示です。  
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-8 K係迄  
03-3291-2961 (FAX-6300) <http://www.books-yagi.co.jp>

# 国文学 9

# 特集 教科書徹底研究

国文学 解釈と教材の研究

平成二十年九月十日発行 毎月一回十日発行 第五十三巻第十三号 九月号  
昭和三十一年九月二十五日 第三編 国語教科書

定価一六〇〇円 本体一五二四円

第五十三巻第十三号 二〇〇八年九月号

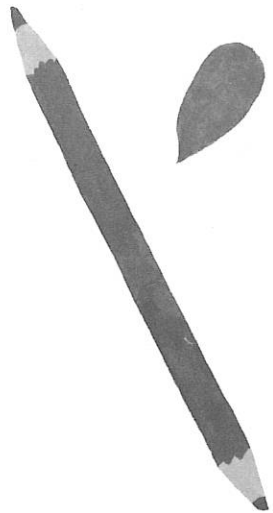
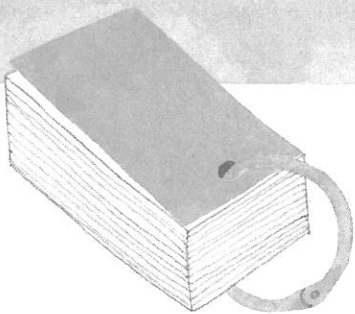
# 国文学

# 特集 教科書徹底研究

- ◆ 二宮由紀子 『くまの子ウーフ』再考
- ◆ 野中潤 定番教材はなぜ読み継がれているのか  
— 生き残りの罪障感と国語教科書
- ◆ フィンランドの国語教科書と日本の教科書 山本茂喜
- ◆ 中国の教育事情について 水野衛子

日本語・日本文学・日本文化

二〇〇八年 第五十三巻第十三号  
解釈と教材の研究



学燈社

ISSN 0452-3016  
雑誌 03787-9



4910037870988  
01524

Printed in Japan

# 心意伝承

—遊働世界に生きる—

ほんじょうまさかず  
本莊雅一

第十二回 山水遊泳を映す生活③ 水害ハザードの神性

## 日本のリビングルームは枯山水

庭付き一戸建て住宅に住むという望みは私にもあったが、今更ローンを組むのもしんどいし、ゆるぎない「負け組」としてはもはやあきらめるしかない。なのでコンクリートの箱に住んではいるが、安い賃貸物件でもバルコニーはある。両親も箱住まいだが、狭いバルコニーに所狭しと観葉植物を並べてミクロな日本庭園を構築している。

戸建て住まいにしろ、箱住まいにしろ、身長ほどの高さのある「窓」を必ず設置して風や光を取り込めるようにしたり、庭のような空間を保持したり、何か日本人なりに、かれを犠牲にしてもこれは必ず維持するといったこだわりを、住まうことの中に持っているのは確かだ。私たちが生活する時空を作る上での、譲れない中心と

はどのようなものだろう。

結論から言ってしまうと、水辺にいたいというイメージである。水域の「取り付く島」を見ている状況なのである。

たとえば日本のリビングルームと、西洋のリビングルームとをくらべてみてもらいたい。

私たちがだれもがリビングルームを持ったら、ソファとコーヒーテーブルをそろえる。ソファの背中を壁や窓際にくっつけて設置し、コーヒーテーブルをその前に置く。こうしてゆったりとティータイムをくつろいで、近代西洋的なライフスタイルに浸っているつもりなのである。

ところが実際の西洋のリビングはどうか。確かにコーヒーテーブルはリビングの中央に置くケースが多いが、ソファを壁にくっつける置き方はほとんど見たことがな

い。ソファごとリビングの中央に出てくる。場合によってはコーヒーテーブルもなく、ソファだけリビングの中央に出して、つまり人間だけ部屋の中央に座ってくつろいでいる例さえある。こんな配置だと、私たちの場合だと落ち着かないだろう。

この違いは何を意味するだろうか。

西洋人にとっては、語義通りソファは安楽用の長いすであり、コーヒーテーブルはドリンク置き場にすぎない。しかし日本人の場合は、その道具を通じて観ている世界が違うのである。

一言でいえば、枯山水を観ているのだと私は思う。

ソファは枯山水の石庭を拝観者が見るときの濡れ縁で、フロアの木目やカーペットが水域の文様、コーヒーテーブルは庭石すなわち浮島である。だから部屋のど真ん中にソファだけを据えてそこにくつろぐなど、自分が海の中の孤島に置き去りにされたような感覚で心細くなるのである。猫の額ほどのリビングであっても、だ。

では西洋風のリビングを日本人の生活に持ち込む以前は、どのような水辺演出があったのだろうか。



西洋のリビング(上)と日本のリビング(右)。ソファを置く位置に明らかな違いがみられる。



## トランスフォーメーション 世界転換の装置

日本人の生活から完全に姿を消してしまったものに、島台というものがある。あるいは洲浜台ともいう。小字館の『日本国語大辞典』によれば「婚礼や供応などの時の飾り物。洲浜台の上に松・竹・梅などを飾り、鶴・亀を配し、尉（じょう）・姥（うば）を立たせたりしたも。蓬莱山（ほうらいさん）を模したものである。」とある。

こうした小道具が日本人の生活空間の、何か大事な局面で必ず設置されるという意識伝承については、すでに郡司正勝や上原輝男が早くから重視していた（郡司正勝『風流の図像誌』一九八七年 三省堂。上原輝男『曾我の雨・牛若の衣裳―心意伝承の残像―』二〇〇六年 暮しの手帖社編集。すなわち、日常世界を、特殊空間に転換させる装置であると。

蓬莱山の模型とも説明されるごとく、海に浮かぶ島という見立てで造形されている。したがって、この小道具を座敷に引き出すことによって、その場に居合わせる人々の座が水域と化し、島台のみが「取り付く島」となる。ちょうど洪水に襲われた町で家々の屋根だけが島となつて点在するような、そうしたイメージを座敷内で演

出するのが、島台という世界転換装置なのである。

島台を「引き出す」と述べたが、供応の場で主人が招待客にふるまうお菓子や「引き出」物を、この島台に乗せて、列席する客の座へ届ける作法もある（郡司前掲書）。幽冥界からの消息はまず島台に取り付き、そこから客人に引き出されるといふ趣向であろう。

いずれにせよ日本人は、現実には水気のない空間を、呪具によって水域として幻視することをやってきた。どうしても、生活領域は水辺のイメージ、みずみずしさと切り離しては成り立たない心意伝承が働いているわけである。



「武家義理物語」(国会図書館蔵)より

島台が完全に消え去った現在は、座敷ではないフロアリング空間を、ほとんど無意識のうちに枯山水庭園に見立て、コーヒーターブルを島台代わりに浮かばせている。間違つても自分がリビングの中央に浮かぼうとはしない。子どもが遊びで座敷の中央を「漂流」するくらいのものだ。段ボール箱の船。ちゃぶ台の筏。ソファの海獣。彼らにはスリル満点の大航海なのである。

## なぜ日本人は水辺の低地に集住するのか

それにしても、なぜこうも日本人は水辺の生活イメージにこだわるのであろう。

実際、次のような指摘を見て、なかば呆れたような、感心したような妙な気分になったものだ。

我が国では、地形・気象などの厳しい自然条件に加え、国土面積の10%を占めるにすぎない沖積平原の想定はん濫区域に総人口の約50%、資産の約75%が集中している。（洪水ハザードマップ作成の手引き）

二〇〇五年 国土交通省河川局治水課 並びに『水のなんでも小事典』一九八九年 講談社ブルーバックス）

いかにバブルの崩壊で土地の値段が下がったとはい

え、車を買うようにして土地を買うことはできない。それに、人々に車が行き渡るほどには土地が豊かにあるわけではないと、私たちは信じ込んでいる。そのように住宅問題が「深刻」視されているが、実は総人口の半分約六千万人が、日本の国土の一割しか有効利用していないのだ。そこに住むためにローンを組んだり家賃を払ったりするということは、わざわざ洪水危険地帯に生涯収入の約二〇パーセントを投下し、殺到していることを意味する。

決して山間部に住めないわけではないのである。朝日を雲海の上で眺められる天上の「町」を、私はいくつも見てきた。

確かにそうした、鉄道から離れた山間部に住まうことは、私のような低地にこびりついていては者からすれば、交通の便の悪い、不自由な生活世界に見える。しかしよく考えてみると、多少不便なのは鉄道を利用して遠出することだけだ。電気水道ガス、近距離移動の足など、どんな山間の「僻地」にいてもすぐに整えられてしまうのが現代である。

大がかりな基礎設備がなくても、自家発電、自家浄水、プロパンガスなど、いくらでも必要な小道具はそろえられる。はつきり言って、日本国内、どこに住んでも



本質的に不便なことは全くないといってよい。不便というなら、たんに通勤の便だけの問題にすぎないのである。

にもかかわらず、わずかな沖積低地に人口が集中するのは、本当に通勤の便のみが理由なのであろうか。

### 日本三景は水害ハザード地帯

私たちが洪水危険地帯に生活の場を置くのは、まさに、水害のハザード地帯だからこそ、そこに生活世界を求めてしまっているのではないだろうか。

前掲『水のなんでも小事典』に、次のような事件の報告があった。二十世紀初頭、ブラジルのカフェランジェロでコーヒー園の開拓に従事していた日系人たちが、マラリアの流行により、一年間で全人口の半分以上死亡し、計画がとん挫した。現地人から忠告されていたにもかかわらず、「日本移民は、マラリアの蔓延する低湿地を好んで開拓し、水田耕作をも」行っていたという（一九六頁）。

単に日本人に水辺を好む性質があるという以上に、私たちはどうしても逆らえない遺伝子のようなものに支配されていると、思わずにはいられない。

日本人が最も愛でる風景として有名なのが、安芸（広島県）の宮島・丹後（京都府）の天の橋立・陸奥（宮城県）の松島、いわゆる「日本三景」である。

言わずもがなだが、どれも海辺の景勝地だ。

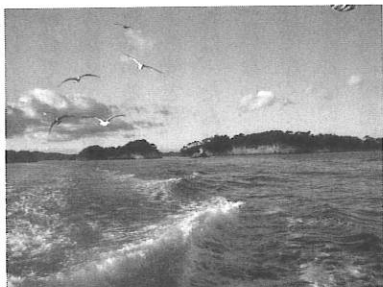
宮島は中国山地の断層活動による地塊が、六〇〇年前の氷河溶解による海面上昇で島となった。

天の橋立は宮津湾に侵入した海流が、土砂を堆積させて造成した美しい砂嘴である。

松島は沈降性海岸地形で、もともとの丘陵地帯が水没し、山頂部が大小二六〇余の島々として点在する。第三紀の凝灰岩・砂岩・礫岩・泥板岩からなるやわらかい地質で、数百万年から数千万年、波の浸食を受けた奇観をなす。

観光客としては風光明媚な名所として賛美していれば事足りるかもしれないが、地元の人々にとっては、これはまた水害との戦いの地でもある。

宮島は、二〇〇四（平成十六）年の台風十八号によって敵島神社の国宝左楽房が倒壊、流失した事故が記憶に新しいが、そうした偶発的なことでなくとも大雨の被害は受けやすい。というのも、海上の暖かく湿った空気にとっては、宮島のような山をもった島はちょうど屏風のような障壁物となる。弥山・駒ヶ林・岩船山といった五



松島



宮島



天の橋立

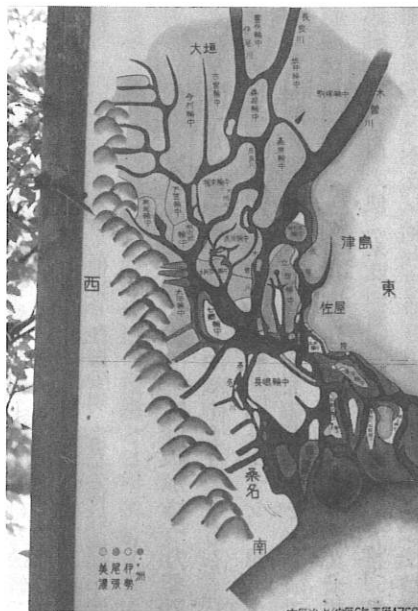
写真協力 メナモミネット  
(<http://menamomi.net/>)  
ラブフリーフォト  
(<http://lovefreephoto.blog110.fc2.com/>)

百メートル級の山が海上の屏風となり、水分を含んだ風が山にぶつかって上昇し、冷やされて結露する。それが雲となって雨を降らせるが、島のように周囲が海の環境だと、全方向からそれが起きるので集中豪雨になりやすい。

二〇〇五年（平成十七年）の台風十四号のときに白糸川の源流で土砂が崩壊し、土石流の発生する災害が起きたが、土地の古老の話によると、同じ場所の土砂災害は昔からあったものらしい。そんな場合でも大聖院は奇跡的に被害をまぬかれたといった伝承を、私も現地の場合で読んだ記憶がある。

梅雨時はもちろん、夏の太平洋高気圧が東日本の天気を安定させる頃こそ、西側の島では逆に荒れ模様となり、災害も起きやすくなるのである。

天の橋立については、地理的にも宮津湾という奥深い入海にあって、基本的には水害のない穏やかな海域のようではある。ただ、大天橋近くに「浪切り地蔵」が立っていて、むかし津波に襲われた時に村を守ったという信仰を伝えている。この長大な砂嘴が、ときとして高潮に見舞われた際の防波堤の役目も果たしたのだろうし、それに神威を感じるほどの海の猛威にさらされることもあったのだろう。



宝暦治水（宝暦6年、西暦1756年）当時の絵図  
川の合流域だが、まるで多島海のような風景であ  
っただろう。

そうして明治期になって、オランダ人技師ヨハネス・デレーケの指導のもと、ようやく三川分流が完成したのであった。

デレーケの治水事業は、まずは治山の考え方に基づく。山地への植林により、山の保水力を高めようとした。さらに水源砂防のため、小規模の砂防堰堤を山間の谷ごとに構築する。もしも平地に土砂が流出し堆積すると、それだけ川幅も狭まり、川底が高くなると水面も上がってしまうので、そうした氾濫しやすくなる状況や、土石流発生の原因を軽減させた。

り大きな水害が生じるといった、矛盾を生み出してしま  
うものでもあった。

「その規模の大きさと、悲劇的な薩摩藩士の死によつて、実際にあげた効果よりもはるかに高く評価されているのでは……」（笹本正治「宝暦治水とその問題点」『木曾三川—その流域と河川技術—』所収 一九八八年 建設省中部地方建設局）とも酷評されるものだが、もとより薩摩藩の責任ではなく幕府のプランニングの難であり、地元の村ごとの対立を背景として、完成形のあいまいなまま着工せざるをえなかったことに問題があったのである（『大垣市史 輪中編』八七〜一〇二頁 二〇〇八年 大垣市）。

松島町は北側の鹿島台町から、南側の塩釜市にかけての広範囲が低地で、雨が降ると周囲の丘陵地帯から水が流れ込んでくるという。特に鹿島台町には品井沼という湿地帯があつて、大雨のたびに水害に見舞われたらしい。元禄期から明治期に至るまで幾度となく干拓事業が行われ、松島湾への排水路としての高城川を完成させた。別の川の地下や丘陵地帯をくぐらせる「潜穴」というトンネル水路をともなった労作である。

しかし現在も地図で見るとおびただしく池沼の点在する地帯で、台風などの集中豪雨に見舞われるとひとたまりもなく、低地全体が水没し、巨大な湖のようになってしまふらしい。ネットなどでそうした記事はたやすく見つけられる。そんな場面に出くわした旅行者は度肝を抜かれて立ち往生し、水害に見舞われている当の地元民からかえって慰められるという、不思議な構図もそこに表れている。

観光とは、その土地の光を観ることである。だが私たちは、たんに「旅行者にとって美しい光」の部分しか見ていない。その土地の風水大地がもたらす恵みと美観だけでなく、人間生活を混沌に帰してしまう猛威まで知らなければ、（それは当然致命的な場合もあるわけだが）本当に観光したことはない。

災害を観光とは何事かとお叱りを受けるかもしれないが、そうではなく、自然の猛威もその土地の霊威であり、光なのだと思ふべきではないかと思ふのである。風土が顕す和霊荒霊とともに自然の光として謙虚に受けとめる道徳を、私たちは取り戻すべきではないだろうか。道徳とはすなわち生命の軌道・徳きである。うわつらの理屈でごまかさない、あるいは特定の価値観で武装しない、素朴で原初的なイメージ運動のことである。

### 輪中地帯にも弥生時代の生活はあった

日本の水害史の中でも特に規模の大きさ、頻度の面で群を抜く地域が輪中地帯であろう。愛知・岐阜・三重の三県境であり、そこは木曾・長良・揖斐の三川が集中する大氾濫原である。いやかつては三川合流していたわけ、陸地の上を河川が網流しているなどというよりも、あたかも広大な入江に中洲が散在するといった光景であつたらう。

近世期の薩摩藩士による分流工事、いわゆる宝暦治水では、完全な分流にはされず、水位によつては合流も起こりうる堤防の作り方（洗堰）であつたため、出水時には、ある地帯では被害はないが、別の地帯では以前よ

そして近代工法によりつつも、二十年もかけた改修で本曾三川を完全に分離させたのである(『大垣市史 輪中編』一〇二〜一二九頁 他に、伊藤安男・青木伸好『輪中』一九七九年 学生社)。

まことにスケールが大きく、かつ自然自体が持つ力をそぐことなく、むしろ高めるように奉仕する趣がある。

当初日本側の関係者からは、「蘭国二山ナシ、急流ナシ・・・其ノ技術ニヨリテ我邦ノ水ヲ隄堤通セント欲スルハ、木ニ攀テ魚ヲ求ムルノ譬ニ同シ・・・」(久米邦武編『特命全權大使 米欧回覧実記(三)』一九七九年 岩波書店)と、オランダ人技師を指導者に採用することについて批判の声があった。実際環境の相違はあって、私的な経験値は生かせなかつたろう。だが、デレーケは日本の自然そのものを見つめ、自然の声を冷静に聞きつけて、一方的に自然を支配するのではない、人間との折り合いの方法を見出していったのである。本当の合理性の、まさに手本ではないかとうならせられた。

さてそれ以前のこの地域のことである。

少なくとも近世初頭以降、「輪中」を発達させるのが、この地域の治水の基本であった。河川の中洲が生活領域だった人々は洪水をよけるために、もともと河川が造成した自然堤防をつないで、中洲の周囲を張り巡らせる巨

大なドーナッツ型堤防すなわち輪中堤(Ring Levee)を作ったわけである。

松尾国松著『濃尾に於ける輪中の史的研究』(一九三九年 大衆書房)によれば、「尾張徳川藩祖敬公実録寛永元年(一六二四年)十二月二二日の条に『立田輪中新田』(三四頁)とあるのが史料上の初見であるという。「ウィキペディア」は鎌倉時代末期の元応元年(一三一九年)に最初の輪中である高須輪中が完成したと述べ、玉川大学の多賀譲治のホームページ「濃尾平野の米作り(輪中)」にも、「鎌倉時代にまず、中洲の周りに堤防を作ることから始まりました」とあるが、ともに出典が明記されていない。ただ松尾も述べるごとく、公文書に「輪中」の語が採録されるには、それなりの時間をかけて人口に膾炙し、定着する過程があつたはずだから、近世以前にさかのぼって輪中共同体が存在していたことは十分考えられる。

では輪中のような治水技術が導入される以前はどうであつたか。

輪中という円形堤防帯が完成する以前は「尻無し堤」と呼ばれる馬蹄形の堤防帯の段階がある。それはどうやら、特に治水技術を施したのではなく、中洲の中の自然堤防地帯その他の微高地に集落を営む共同体の、生活

領域であつたらしい(『大垣市史 輪中編』伊藤安男・青木伸好『輪中』)。ということは、特に治水処理のされていない時期から、こうした水害危険地帯に人々は暮らしていたことになる。

木曾・長良・揖斐三川の河口より北へ三十キロほどに位置する大垣市は、伊吹山地から相川と大谷川が流し込んだ土砂が堆積した扇状地帯と、沖積低地とからなる。近年遺跡等の発掘調査が盛んに行われ、ひとまず近世以降の輪中地帯であつた低地にも、弥生遺跡が分布していることがはつきりしてきた。注目すべき発見である。

現代の地表が低湿地帯であつても、その下層には旧河道が造成した中洲が埋没しており、河川の流路が変わつた後は、微高地として居住できる領域となつた。そして周囲の低湿地帯を水田耕作地帯として利用していたらしい(『大垣市遺跡詳細分布調査報告書—解説編—』一九七七年 岐阜県大垣市教育委員会)。

つまり「治水」技術を駆使したというよりも、自然の言い分を聞きながらの生活技術を練つていたということなのである。デレーケの近代治水技術とは対極にあるように、本質的な合理精神においては通底するものがあると思われる。つまり自然に同化するほどに、対象の本質を認識しようとする心的態度が、先史時代の人々か

ら、近代のこの国土の声を虚心坦懐に聞こうとする異邦人に伝承されたのである。心意伝承とは、生物学的遺伝子の共有を絶対条件とはしないものなのであろう。

今日のわれわれの感覚からすれば、宅地造成や治水技術の低かつた時代に「水害の地」である低地に住むのは、封建的な社会制度や権力者の圧政に組み伏せられ強いられてのことであると考えがちだが、必ずしもそうではなかつたのではないか。むしろ人々が積極的に、そこを神聖なる地として、集住したという側面もあつたのではなかつたか。

「定住」はイコール「永住可能状況」だと私たちは考えてしまう。だから永住性が保障されないとはい、「災害」として、人間にとって不都合なものと規定するが、もともとそうだったのだろうか。

自然に逆らわず、自然と相談しながら、その脅威にひれ伏し、あるいは恵みを受容する生活は、不定期な移動をも伴つた「定住」であつたのではなからうか。低地は洪水危険地帯でもあるが、洪水はまた肥沃な土砂を供給してもくれるということを、今日の小学生も学んではいない。ただ、古人のように生活の実感としてとらえてはいないのである。

大地山水の遊働は、プラス作用であつてもマイナス作

用であっても、神聖な世界転換として、われらが祖先たちは受けとめていた。それを現代人の心意はなくしてしまっただろうか。

### 「戦争を知らない子どもたち」への危惧

輪中地帯のいたるところに水神社（水神さん）が祀られている。水の恵みを祈るものではなく、水難除けを願ったものが多いのだが、特に興味深いのは、堤防決壊地に水神が祀られている例が、少なくないことである。

たとえば、杭瀬川左岸堤上の割田町にある水神「決壊守護神」は、明治二九年に堤防が決壊したところであり、今でも決壊日の九月七日が祭礼日となっている（大垣市輪中館資料No.9。並びに『大垣市史 輪中編』）。

こうした祀りかたは、災害が起きた場所や時期を記憶し、常に水害に備える心構えを持つためであると説明されている。地元民も学者も、例外なくそう述べる。

確かにその通りではあろう。一度決壊したところは、よほど大幅な地形変更でもない限りは再度決壊の恐れがあるし、時期的にも同じような時期に同様の気象条件にさらされるだろう。

しかし、たとえば、もともと熊野本宮が、流失しやす

ったものだった。僕らは軟弱だけどそれだけ平和の象徴なので認めてくださいと、世間様に媚びているのが癪であった。

が、今にして思えば、まさに大人たちの危惧の通りだったのだと思う。災厄も神威発動なのだ。少なくとも有史以前の心意伝承がやはり残っているから、神威発動の靈威を十全にこうむっていない私たち以降の世代の魂の成長の仕方を、大人たちはつい心配してしまうのである。そしてその心配は、決して杞憂ではなかった。宮崎勤事件をはじめ、現在も毎日のようにメディアを沸騰させる異常事件の洪水を、いちいち列挙するまでもあるまい。

話を戻すと、輪中地帯の水神社は水の猛威そのものを神として祀っているのである。生活を破壊し、人命を奪う恐るべき暴威も、日本人にとっては崇敬すべき神なのであった。

私たちが水辺のイメージを生活の中に保存しようとするのは、順境の場合でも逆境の場合でも、そこが最も神威発動の靈威を体感できる遊働世界だからである。生活資源としての水を確保した、という以前に、水の神性とともにあることが、生活の必須条件と、感じてしまうのである。

い川の中洲に鎮座したり、人跡未踏の峻嶒な山中に神社仏閣が建立されたりもするように、人間生活にとって都合がよいか悪いか以前に、絶大な力を見せつける場所それ自体を、神として崇敬する心意が先にあったのではなかったか。

私は思う。

飛躍した印象をもたれるかもしれないが、私のような高度経済成長期生まれの世代は子どものころに、大人やお年寄りから、それこそ何十回も何百回も言われ続けたことがある。

「おまえたちは幸せだ。戦争も経験せず、餓えたこともない。家を失うような災害に遭ったこともない。本当に幸せだなあ」と、いかにも私たちが何か不当に今の暮らしを享受しており、またそうした一連の災厄をこうむっていないから軟弱な人間になっているのだ、という裏声ばかりがこちらに響いてくるような話である。聞かされるたびに、子ども心に理不尽な尋問を受けている気分になったものだった。

そういえば「戦争を知らない子どもたち」という、遠慮がちに聞き直った歌が流行していて、いったい誰がもてはやしているのかわからないが、その曲が流れるのを聴くたびに、当事者世代の一員である私は惨めな気分にな

## 別冊 國文學

本誌とは一味違う  
魅力が楽しめる

古典学習の必需品[必携]シリーズ

万葉集を読むための基礎百科  
神野志隆光編 定価1470円

夏目漱石事典  
三好行雄編 定価2100円

日本の古典 名言必携  
久保田淳編 定価1370円

宮沢賢治必携  
佐藤泰正編 定価1370円

古事記日本書紀必携  
神野志隆光編 定価1223円

ノンジャンルで文学を楽しむ[教養]シリーズ

ギャンブル——破滅と栄光の快楽  
定価1575円

左右／みぎひだり  
雑誌版1680円 改装書籍版1785円

ようこそ絵本の世界へ  
雑誌版1500円 改装書籍版1785円

その時何歳だったのか  
雑誌版1790円 改装書籍版2100円

宗教のキーワード集  
雑誌版1790円 改装書籍版2100円

學燈社

〒169-8608 東京都新宿区西早稲田3-5-10  
電話 03(5228)7154 FAX 03(5228)7150

すべての商品はHPでもお買い求めいただけます  
<http://www.gakutousya.co.jp/>